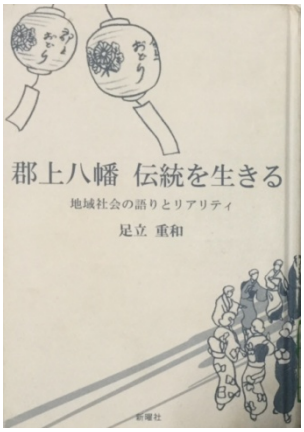
郡上八幡 伝統を生きる

表題は足立重和著のタイトルである。「地域社会の語りとリアリティ」という副題のように、社会学を研究する著者が、長年にわたるフィールドワークをもとにまとめた。



飛騨高山の斐太高校から郡上高校に転校し、国鉄「越美南線」深戸から2年間通ったので、郡上八幡には愛着がある。久しく訪ねていないが、遠い昔を思い出しながら、本書から郡上八幡をすこし紹介していきたい。

民俗学者の宮本常一は、民俗調査のなかで「とくに大切なことは高いところへ上って自分の調べようとする村と村をとりまく自然環境を見ること」だと述べている。そのアドバイスに従って、郡上八幡の全容を見わたすことができるお城山に登ってみる。四方を山に囲まれ、それら山の緑から浮かび上がったその町場全体は、地元の人々が言うように、なるほど〝魚の形〟のように見える。

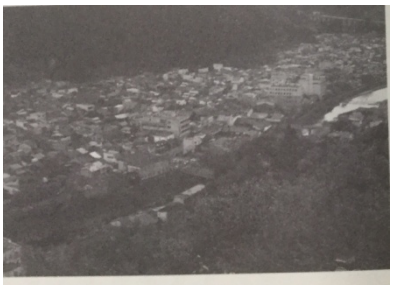


写真1・1　郡上八幡 市街地全景
（郡上市八幡町，2008年11月12日撮影）
城山からの眺め

青々とした奥美濃の山々を越えていくと突如として小京都を思わせる町並みが出現する―

市街地区は八幡町の中央に位置し、長良川とその支流である吉田川が合流しており、合流点から吉田川沿いにかつて城下町が発達した。市街地区は四方を山で囲まれた狭い盆地のなかにうなぎの寝床のようなかたちの町家がひしめき合っており、それを取り囲む山々には狭い農地を伴った山村集落が点在している。

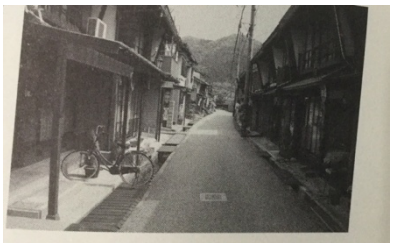


写真1・2　柳町の古い町並み
（八幡町上柳町，2009年5月15日撮影）
袖壁のある民家が並ぶ。多くが大正から昭和初期にかけて建てられた

中世期からこの地域は、太平洋側（岐阜）や日本海側（高岡・越前）、あるいは内陸側（飛騨・信濃）の三方をつなぐ交通の要衝、結節点であった。

太平洋側からは古くは霊峰白山へ至る道として、また日本海側からは中世期の浄土真宗の流入に伴ってすでに旧街道が走り、それらの街道は郡上八幡へと開かれていた。そのため、いまでも地元の人々は、郡上の生活文化の底流には白山信仰と浄土真宗という二つの信仰があり、その影響を受けたと繰り返し指摘する。

（2016年10月4日）